

なくて、双子の兄弟という彼の顔を見ること  
ができなかったのだ。

「母さんは森に捨てられた俺を育ててくれ  
た。狼が住むような森で、人家なんてない  
ころだ。獣たちの中で俺を育てるのはすごく  
大変だったはずだ。それでも俺はここまで育  
って……。でも、ある日の夕方、釜戸の前で  
倒れていた。多分、何かの病だったんだと思  
う。俺は助けられなかった」

それから言葉が続けられなくなったが、ト  
ウラスは声を振り絞ってようやく言った。

「……すまない」

フェリスが首を振るのが分かったが、申し  
訳なくて、顔を上げられなかった。その代わ  
り、トウラスは胸に下げた革袋を引っ張りだ  
した。いつも服の中に身につけてあるそれか  
ら、中の小さな耳飾りを取り出した。以前ヒ

ヨウビに付けてやっていたものだ。

やっと顔を上げて、フェリスにそれを差し  
出した。

「形見だ。……墓は森に作った。ここからは  
ずいぶんと遠い森だ」

フェリスは受取ってしばらくじっと眺め  
ていたが、方耳の耳飾りを外してそれを着け  
た。

それからは厳かな沈黙が流れたが、フェリ  
スが穏やかに笑って崩してくれた。

「いつも心のどこかで足りないものを感じ  
ていた。寂しさや悲しさが混じったような、  
不思議な心の穴があった。それはお前だっ  
たのだな」

「闇の子の俺が邪魔じゃないのか？」

自分は闇の子として捨てられたはずだ。こ  
の容姿が何よりの証拠であろう。光の子フェ

リスはこのヒェミチリアスの一般的な容姿だ。それどころか、一点の曇りもない美麗な黒髪と黒眼をしている。

生まれながらの白い髪と灰色の瞳は、誕生の瞬間から恐れられたに違いない。自分を卑下するわけではないが、そういう理由で森にいたのは事実だ。

しかしフェリスは、良い意味でトゥラスを裏切って、柔らかくこう言った。

「同じ親から生まれた兄弟。どうして憎むことができよう」

民が王子を好く理由が、そこにあった。彼は母の面影を浮き彫りにする優しげな眼差しを向けてくれる。このような穏やかな顔は自分にはできない。しかし感覚として、やはり彼は他人ではなかった。同じ命を分けた双子。全く別の道を歩んで今ようやく出会えた

のは奇跡だ。

母が昔、名前が自分を導くと言ったこと、自分には森で生涯を閉じてはならない運命があるということ、それらがなんとなく現実味を帯びてきた気がする。偶然のチュンオウとの出会いで森を抜けだし、ここまでやってきた。そして、世界には数えきれないほどたくさんの人間がいるというのに、行き着いた先にフェリスがいた。

しかし本当に探していたのは、夜鷹の主。世界に闇を広げる者。フェリスの肩には、あの夜鷹が羽を休めている。何かの間違いじゃないだろうか。このような穏やかな笑みの彼が、闇の元凶であるはずがない。そう信じたかった。

「フェリス。このヒェミチリアスは、どうして戦を広げるんだ？」

トゥラスは、回りくどく聞くつもりはなかった。この強い優しきを持ったフェリスなら、確かで後ろめたくもない答えを持っていると思ったのだ。

だがフェリスは穏やかな笑みを消し、悲痛な面持ちになって黙ってしまった。

トゥラスはフェリスに話してもらうために、その質問の意図を話すことにした。

「俺はずっと森で育った。俺はそこで一生を終えるはずだった。だがそこに、一人の爺さんが現れた。爺さんは俺を森から出すきっかけをくれて、そして旅に同行させてくれた。

……爺さんの旅の目的は、広がる戦を無くし、この世界に均衡を取り戻すことだ。爺さんは闇が世界に広がっていると聞いていた。その闇が戦の元凶だから、戦ばかりをするヒェミチリアスに行けばどうにかできるんじゃない

いかって、それでここまで旅をしてきたんだ」  
フェリスは押し黙っていたが、辛そうに頭を抱えた。

「その老人の言うことは正しい。……この国が何もかも滅茶苦茶にしようとしている」  
ようやくフェリスが口を開いたので、トゥラスはじっと聞いた。

「ヒェミチリアスは貧しい国だ。民に豊かな生活を与えられる力すらない国なんだ。……昔、農耕で安定した食糧を得ようとして遊牧から離れた民は、この地に定住した。山が近いから、良い畑が作れると思ったのだろう。

だがこの土地は痩せている。農耕には適さない。だから定住を選んだ民は、遊牧の時よりもたくさんの羊を飼って、羊の毛織物を貿易の品とし、食糧を輸入するようになった。しかし最近はその国も織物は盛んになって、値

は下がるばかり。鉱山がないかと山崩しに懸けてみたものの、金属も宝石も無かった。それどころか切り崩した山は木々の根を失って、豪雨の時には土を大量に街に流す。それで命を落とす民も多く、復旧工事に金はほとんどなくなり、食糧を輸入する余裕もなくなつた。……まだ蓄えはあるが、それも時間の問題だ。だから父は、……そう、私とお前の父、グレネリアホパセ王は、無理やりにでも他国から食糧や資源をむしり取ろうと……」

そこでフェリスは口をつぐんだ。きつと、もう言葉にできないのだ。彼も苦しいのだろう。目の前にある戦の火種を、どうすることもできなくて。

父親が戦の元凶のようだ。会ったことも話したこともないのでフェリスほどの苦しみはなかったが、自分の父親が戦を仕掛けてい

ることには確かに複雑な心境になる。

「ついこの間はエリノワ皇国を焼き尽くした。あそこは金きんがたくさん採れるから狙われたんだ。今度は南と東を攻めると言っていた。私に、私に兵を指揮しろと……。そんなことできるはずないだろう！」

「フェリス……」

唇を噛みしめる双子の兄弟の苦しみが、自分にも流れ込んできた。濁流のような悲しみが渦を巻き、彼の心をかき乱している。物腰や言葉遣いから、きつととても穏やかなこの兄弟が、これほど不安定な心を抱えていると思うと辛かった。彼の芯となる力がまだどうにか支えているようだが、それが揺らげばすぐに壊れてしまいそうだった。

「トゥラス」

涙を称えた彼の目が、トゥラスを捉えた。「私は光りの子ではない。私は何もできない弱い王子だ。お前も悪魔の力を持つ闇の子などではない。光はお前だ、トゥラス！ お前が闇を葬るといふ目的を持っているというのなら、どうかこのヒェミチリアスを止めてくれ！」

フェリスが、トゥラスの両腕を掴んだ。力が込められて痛いほどだが、それが彼の思いの強さなのだ。

「父は世界を制圧しようとしている。目的はすでに自国の平和ではない。国の危機を好機と言わんばかりに世界統治したいという、ただの欲なんだ！ 戦の先には何の幸せも待っていない。地獄しか待っていないんだ！ だからトゥラス、どうかお前が……！」

「弱音を吐くな、フェリス。お前がそういう

心を持っているなら、何かできることはあるはずだ。お前だけが背負うわけじゃない。俺も一緒に背負う。だから、まだあきらめるな！」

フェリスはずっと一人で闘ってきたのだろう。父と言えども王だ。反対に、王と言えども父親だ。おほん 謀反など起こせるはずもなかったのだらう。

だからと言って、言いなりになれるほどフェリスは弱くもない。フェリスは彼なりに彼の地位で、どうにかしようとしてきたはずだからこうして、悔し涙をためている。

「聞け、フェリス。俺はここに来るまでにアルタスという遊牧の民の友人ができた。アルタスも俺に言ったんだ、どうにか戦を止めてくれと。戦なんて誰も望んじやないんだ。」

だから絶対に止められる。信じる！」

トゥラスの腕を強く握るフェリスの手。それを握り返し、トゥラスは続けた。

「俺たちが同じ命を分けて生まれ、離れ離れにされてもこうして出会ったのには理由があるはずだ。双子なのに今まで全く違う生き方をしたのは、俺とお前には別々の役割があるからなんだと思う」

## 第五章 逆さの鏡

それを聞いて、フェリスは何かを思い出したようなそぶりを見せた。

「トゥラス。お前、石を持っているか？ 私は石を握って生まれてきたらしい。双子ならば、その証としてお前も持っているだろう？」

母が言っていたことは本当だったのだ。手放すなど言われた石は、先ほど母の形見を出したあの小さな革袋に入れて、肌身離さず持っている。トゥラスはもう一度革袋を取り出

して、手のひらに石を出した。

乳白色の透明な石の中には、何色もの光の欠片が入っている。涙型を引っ張りながら曲げたような、変な形だ。

すると、フェリスも似たような石を出してきた。胸に下げた革紐を手繰ると、そこに黒い石が下げられていた。色は黒だが、トゥラスのと同じように、中には虹色の光の欠片が輝いている。曲がった形も同じだった。

「この石、妙な形だと思っていたんだ」

フェリスは石に巻きつけてあった革紐をほどいた。石の向きをトゥラスの石と逆さにし、トゥラスの目の前に突き出した。

「まるで私たちを表しているようだ。こうすれば、一つの形になるはずだ」

そう言われてみれば、フェリスの石の曲がった部分に自分の石の丸い部分を合わせれ

ば、自分の石の曲がった部分はフェリスの石の丸い部分にはまりそうだ。トゥラスはフェリスが差し出したその石に、自分の石を組み合わせてみた。そうすると、二つの石は見事に一つの形になった。

するとその瞬間、石から強烈な光が吹きだした。それは光なのに力があった、トゥラスは後方へ吹き飛ばされてしまった。

甲高い声が頭に響いた。耳の奥が痛くて、頭が割れそうだ。頭を押さえて身を縮めても、声は容赦なく頭の中を射てくる。

フェリスも光の力に吹き飛ばされたようで、部屋の奥の壁の手前で倒れていた。しかし光の中で目を凝らして見ると、フェリスは真っ黒い煙のようなものに襲われていた。

「フェリス！」

フェリスの方に行こうにも、こちらの光の

勢いも強くてもうにもできない。

真っ白いまぶしい光が目眩させる。しかし光はめいはいっぱいに膨らんだかと思っただけで、突然消えてしまった。同じように甲高い音もなくなっていた。手には自分の石が残っている。

フェリスの方を見ると、フェリスは気を失っていた。夜鷹は難を逃れたのか、吹き飛ばされた椅子の上にとまり、鳴きながら羽ばたいていた。

しかし夜鷹など気にしている余地はなかった。気を失ったフェリスの周りには、まだ黒い何かがゆらゆらと漂っていたのだ。

「起きろ、フェリス！ 大丈夫か！」

トゥラスが駆け寄りそうになると、黒いものが強い風を巻き起こして近づけなくなった。

風は次第に渦になり、黒い靄も巻き込んでフ

エリスを取り巻いた。

すると、唐突に風が止んだ。黒い煙の残骸が残る中、ゆらりとフェリスが起き上がった。

「おい、大丈夫か！」

フェリスはゆっくりと顔を上げる。しかしその目は、これまでのフェリスのものとは全く違う、冷たい光を宿していた。

フェリスはその眼をトゥラスに向けたまま、ふらつきながら壁にかかっている剣に手をかけた。そして次の瞬間、跳躍と共にフェリスは斬り込んできた。

突然のことに、トゥラスは鞘のままの剣で受け止めていた。龍の彫刻の部分に、フェリスの剣の刃が食い込む。

「おい、フェリス！ 一体どうした！」

容赦ないフェリスの力に、トゥラスは押し

返して隙を作ってから一度飛び退いた。

もう斬り込んでほこないが、そこに佇むフ

エリスは明らかに先ほどまでと違う顔つきだった。フェリスの周りに黒の残骸が漂っている。夜鷹が飛んで、フェリスの肩にとまった。

「ようやく手に入った。これでかなり動きやすくなったな」

彼らしくもない妖しい笑みで、フェリスは口元を歪ませた。身体を確かめるように手を握ったり開いたりしている。そしてこちらを見る時、おぞましい目でにたりと笑った。

「そちらもようやく目覚めたか、光よ。僕はお前の存在を知っているが、お前は僕の存在を知っているかい？」

「お前は誰だ……！ フェリスをどこへやった！」

「ほう。お前は吞まれなかったようだな」



虎の目で睨むトゥラスに、彼は鼻で笑った。「僕は闇。お前は僕を知らないだろうが、僕はお前を知っている。だが反吐が出るほどにお前のことが気に食わない」

一体何を話しているのだろうか。

しかしトゥラスが問う間もなく、フェリスは続ける。

「光よ、僕はお前からこの世界を奪う。これまで僕には半分しか割り当てられなかったが、全てを僕が支配する。だから……」

フェリスの笑みが消えた。

「お前はここから消え去るがいい！」

切っ先の軌跡が、白の前髪を幾本かさらっていった。咄嗟に後方に飛んだトゥラスは、石の廊下に出ていた。

廊下の奥から、兵らの足音が聞こえる。今の騒ぎを聞きつけてやってきたのだろう。兵

らが走ってくるのと反対側は、突き当りで壁だ。先ほど入ってきた守衛の部屋から外に出るしかない。

唐突に大きな雷が落ちた。雷の後には豪雨が始まった。しかし暗闇で雨粒は見えなかった。いつの間にかトゥラスの夜目も利かない闇が、フェリスの部屋に充滿していたのだ。

「フェリス！」

「違う。僕は闇だ！」

黒い衝撃波に、トゥラスは廊下の石壁に叩きつけられた。運悪く丁度そこに兵士らが到着し、隙だらけだったトゥラスは一瞬で抑えつけられてしまった。

「フェリス様、ご無事ですか！」

「ああ、大丈夫だ。お前たちが早く駆けつけてくれたから、私は助かった」

兵士に答える声は、あの穏やかな声だった。

抑えつけられる手に抵抗しながら顔をどうにか上げて見た先に、柔らかな笑みがあった。しかしそれは上辺だけのもので、本当のフェリスではなかった。

「お前、フェリスになりすまそうと……！  
フェリスを返せ！」

「わけのわからないことを言うやつだ。お前たち、そいつを牢に入れてしまってくれ」

兵士らは大きく一つ返事をして、トゥラスを無理矢理に立たせた。身をよじって抵抗したが、彼らの拘束には微々たる抵抗にしかならなかった。

「お前ら、あいつがフェリスだと思ってるのか！」

「黙れ！」

一人の兵士が、トゥラスの髪を掴み上げた。

その兵と目があったが、トゥラスは猛虎の目

で睨みつけてやった。自分より長くフェリスの近くにいたやつが、どうしてこの変貌に気がつかないのかという怒りを込めて。

すると兵士は、驚いて目を見開いた。彼の眼に、自分の姿が映っている。

「白いフェリス様……！」

彼がそう言った直後、石廊下の奥から突然大量の水が流れ込んできた。咄嗟にトゥラスは身構える。身体の周りを細長いものが幾つも通り過ぎ、兵士らのみを押し流した。それは水の蛇だった。

トゥラスは水の蛇が流れ込んできた方を見た。暗闇の奥から、杖を片手に蛇の主が歩いてくる。

「貴様、へまをしただろ。突然城が騒がしくなったぞ！」

美しい眉目を鋭くして、雨にずぶぬれにな

ったりビが言った。

「なるほど。水がそこにいるのか」

闇の充滿した部屋の中から声がする。リビがそちらに向いて、眉根を寄せた。

「まだ誰かいるのか？ ……まさか、夜鷹の主——！」

トゥラスはずっと握っていた石を革袋に戻し、剣を構えた。闇をまとったフェリスは、夜鷹を肩に乗せ、右手にはまだ剣を握っている。トゥラスが警戒していると、フェリスは部屋と廊下の境で立ち止まり、妖しい笑みをリビに向けた。

「トゥラスと同じ顔！」

驚いたリビに隙ができた。いつの間にか、フェリスはトゥラスの目の前から消えていた。

「水よ」

反射的に声の方に向くと、リビの目の前に彼が立っていた。リビも、フェリスの瞬時の移動に驚いた様子だったが、臆することなく、惜しむことのない鋭さで睨みつけていた。

「お前は誰だ！」

「僕に気づかないのかい？ 君に気づいてもらえないとは、それは悲しいね。僕は闇だよ」

「夜鷹の主か……！」

「やはり、そういう噂を流したのは君なのかい。僕には夜鷹しかいないと思っているんだね。そんなことはない。確かに孤独だが、昔は君も僕をよく知っていたはずなんだけれど」

妖艶な微笑みで、フェリスはリビの頬に触れた。リビは眼光すらぶれさせず、フェリスを警戒している。

「水よ、僕のところへおいで。そして僕の手助けをしておくれよ。遠い昔のように」

「断る！」

リビはフェリスの手を振り払い、杖をフェリスの前に突きだした。とたんに水蒸気の爆発がフェリスを吹き飛ばした。

「やめろ、リビ！」

「何を言う！ 夜鷹の主だぞ！」

「違う！ いや、そうかもしれないけど……」

俺の双子の兄弟なんだ！」

「なんだと？」

倒れたフェリスの上で、夜鷹が鳴いている。

フェリスはまた気を失ったようだった。

「フェリス、大丈夫か！」

心配になって駆け寄ろうとした時だった。

フェリスの目がぎらりと光ったかと思うと、

突然苦しくなった。

「この運命はなかなか面白い。兄弟愛か。かわいそうだな、光よ」

首を絞められていた。声が出せない。締められている部分で脈がどくどくと響き、意識が遠くなる。

リビが自分を呼ぶ声が聞こえる。その声が聞こえなくなってきたところで、この体は宙に投げられた。背中と後頭部の大きな衝撃に、呻きさえも打ち砕かれた。

「光よ。お前と僕は出会うはずのない存在だった。だがこうして出会ったのは、僕の心が少しでも働いたからなのかもしれない。だとすれば、僕の反乱も運命づけられたものなのかもしれないね。……だから光よ、僕のために消えておくれ」

「何をわけのわからないことを！」

自分の代わりに言ったのはリビだった。リ

ビの力で、水が集まってくる。  
「同じ手には乗らないよ。僕は君より強大な力なのだからね」

「そんなこと、とうに承知している！」

大量の水が流れ込んできた。フェリスを飲み込み、そしてトゥラスも飲み込まれた。

濁流の中にふわりと身体が浮き、誰かに襟元を掴まれた。それはリビだった。リビはそのまま水の中で跳躍した。

水と一緒に吐き出されたのは、宙だった。城の外、夜の空。リビはフェリスとの対峙を避け、水の流れて窓から飛び出したのだ。

水に包まれての着地は、かなりの衝撃が吸収された。水は同時に弾けて地に広がり、消えていった。しかし今度は嵐の雨粒が容赦なく肌を突いた。

「嵐に感謝しろ。雨の水のおかげでお前は救

われたのだ」

リビは嵐にも動じずに、杖を握りしめた。周りには騒ぎを聞きつけた兵士たちが集まってきた。

「さっさと立て！ チュンオウ様が道を開けて下さる」

ともかく動揺を奥へ押しやって、トゥラスはこの状況を切り抜けることに決めた。剣を抜き、リビと背中を合わせて死角を消した。

「お前に借りはつくりたくない」

「だったらその分働いてみる」

リビが言い捨てたのを合図に、トゥラスとリビは跳躍した。トゥラスは押し寄せてくる兵を蹴り飛ばし、鞘がついたままの剣で甲冑の胴を殴り捨てた。背後ではリビが水を操り戦っている。

「トゥラス、リビ！ 無事か！」

嵐を縫って、声が聞こえた。チュンオウがリョウキを走らせてやってきたのだ。激しい雨の中、チュンオウは老兵のごとく堂々たる姿で剣を片手に、リョウキにまたがっていた。

「退路は定まっておる。行くぞ！」

「リビ、リョウキに乗れ！」

トゥラスは背後のリビに叫んだ。リビは水を操り、目の前の兵を薙いでから振り向いた。

「馬鹿を言うな！ お前は どうする！」

「俺は……」

城を見上げる。窓辺の彼がにたりと笑った。

「あいつをなんとかする！ 爺さん、先にリビと行ってろ！」

「何を言っている！ 誰がお前を助けに来たと思っているんだ！」

そう言い放つリビに言い返そうとしたトゥラスだったが、異様な雰囲気を感じて身構

えた。リビもチュンオウも気づいたようで、言葉を切って警戒した。

兵士たちの様子がおかしい。鬨の声や雄叫びは消えて、誰もが無言で立っている。地に崩したはずの者たちも、何かに操られるように起き上がった。不気味な静けさだった。

「滑稽だね。消えてしまいな」

フェリスの声が闇に響いて、それを合図として兵士が波のように押し寄せてきた。

「まずい、退路が！」

チュンオウが叫んだ。トゥラスは舌打ちをして剣を握り直した。操られてしまうなら、気絶させるだけではだめかもしれない。

仕方なく覚悟を決めて、鞘を抜いて剣を構えた時だった。一帯に、突如大きな雷鳴が響き渡った。地を揺らし、雨も吹き飛ばすような、全てを震わせる声だった。その雷鳴と共

にやってきた白い風は、トゥラスの前に堂々と立ってみせた。

「お前……ヒョウビ！ ヒョウビなのか……！」

もう一度闇に声を轟かせたその虎は、あの子虎ではなかった。トゥラスの二倍三倍はありそうな巨体で、猛々しくトゥラスを守るよ

うに立っている。だが身体は黒の縞しまが映える

白。その耳には、デニアで買った耳飾りが見えた。

虎はこちらに一瞥を向ける。やはり、ヒョウビだった。

「リビ、リョウキに乗れ！ 行こう！」

今度は言わずもがなの素早さで、リビはチユンオウの後ろにひらりと乗った。トゥラスはヒョウビと共に兵をいくらか押しやって

から、背を差し出すヒョウビにまたがった。

目の前にやってくる兵を、リョウキとヒョウビが獣の脚で見事に抜いてみせた。チユンオウとリビを乗せたりョウキが前を走り、トゥラスは波打つヒョウビの背で剣を振るった。

嵐の中の逃避。顔を打ち付ける雨風に必死に目を開けて、トゥラスらは闇の中を突き進んだ。

闇。闇とは何だろう。フェリスを乗っ取ったものが闇なのだろうか。フェリスはもともと二つの人格を持つのか、それともどちらかを演じているのだろうか。

自分は闇で、トゥラスのことを光だと言っていた。

闇の子は自分だったはずだ。そうでなければ、森に捨てられるのはフェリスの方だった

はずだ。

「何がどうなってるんだ……！」

胸の革袋の石が揺れて胸を打ち付けるごとに、フェリスの優しい微笑みが脳裏に強くよみがえる。嵐の中の逃避は、翌朝まで止まることはなかった。